

紆余曲折を経てたどり着いた

『心がととのう、心地よい』暮らしと働き方



玄関を抜けて案内された部屋は、やわらかな光と落ち着いた色合いに包まれていました。窓辺の白いレースのカーテンが風に揺れ、静かで心地よい時間が流れています。

そこへ、やさしい笑顔で迎えて入れてくれたのが、関香苗さんでした。アンティークプレート専門店の「aru（アル）」店主としてネットショップを運営しながら、Instagramで心地よい暮らしの発信を続け、フォロワー数が2万人を超え、ライターとしても活動しています。

けれど、その歩みははじめてから

「好きなことを仕事にしよう」と計画して始まったものではありませんでした。

今日は、香苗さんがどのようにして今の暮らしと働き方を築いていったのかについてお話をお伺いしました。

好きなことをして生きようと思った、人生の転機

箕輪町生まれ。大学卒業後は東京から地元へ戻り、銀行に就職。約2年半勤務しましたが、文学部出身で「書く仕事がしたい」との思いから、地域情報紙の記者に転職しました。

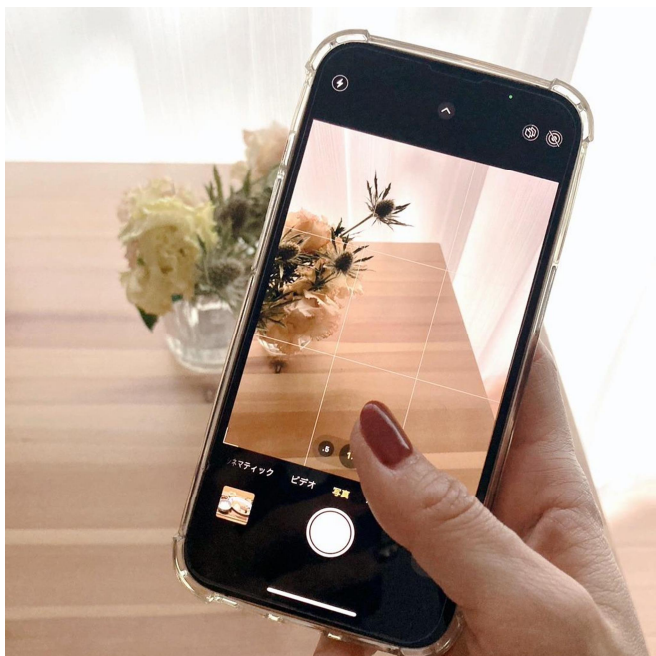
結婚を控えていた2012年、人生を大きく変える出来事が起こりました。

結婚式のわずか1週間前、リハーサルの帰りに交通事故に遭ったのです。

運転していた車は大破、自身も複数か所の骨折。3ヶ月の入院生活を余儀なくされました。もちろん結婚式は延期となりました。

「本当によく生きていたね」と言われるくらいの重大事故で、事故の記憶は全くなく、気づいたら病院のベッドの上でした。この生死をさまよった事故の経験は、それまでの価値観を大きく変えたといいます。





「人はいつ死ぬか分からない。だったら、好きなことをして生きよう。」

今もこの思いが、その後の人生の土台になっています。

「売れなかった1年」が 今の私をつくった

結婚後は、夫の転勤に伴い、長野県内を転々とする生活が始まりました。

2015年に松本市で長男を出産。子育てが始まりましたが、その後も夫の転勤が続き、知り合いのいない地を6度引っ越しました。夫は仕事が忙しく、ほとんどワンオペ育児。両親も仕事をしていたのでなかなか頼ることができませんでした。

当時は保育園の待機児童も多く、すぐに働きに出ることもできませんでした。

家にいる時間が長くなるほど、「社会から取り残されているような気持ち」になっていったといいます。

「誰かと話したい。社会とつながっていたい。」そんな思いで始めたのが”Instagram”でした。

当時はInstagramを仕事にするつもりなどなく、好きな心地よい暮らしについての文章を書き、写真を撮り、自分の日常を少しずつ発信する。ただそれだけで満足でした。

発信を続けるうちに、同じように子育てをしている人、暮らしを楽しんでいる人たちと少しずつつながりが生まれました。そこで、さらにオンラインコミュニティにも参加しました。

子育て中のママが集うコミュニティは、香苗さんにとって、社会とつながる大切な居場所でした。

ある日、そこで出会ったハンドメイド作家さんから、思いがけない一言をかけられます。

「ネットショップを一緒にやってみない？」



「ネットショップなら、パソコン1台とネット環境さえあればどこでも仕事ができるかも」と想像し、もともと雑貨やネットショッピングが好きだったので、その提案にワクワクしました。

「じゃあ、自分でやってみよう。」

その小さな決断が、今の仕事につながる第一歩になりました。

とはいえ、このネットショップは順調とは言い難く、ほとんどが赤字かよくても収支がトントンという状態で、1年ほどで撤退しました。ですが、この経験があったからこそ「本気で仕事にしよう」と覚悟することができました。

振り返ると、Instagramは仕事を始めるためのツールではなく、「孤独だった自分を支えてくれた場所」でした。

だから今でも、「誰かの暮らしが少しでも心地よくなるような発信ができればいいな」という思いで、一枚の写真、一つの言葉を大切に届けています。



東京で開催したPOP-UPイベントにて

小さな挑戦を積み重ねて、少しずつ自信がついていった

2020年4月、アンティークプレート専門のネットショップ「aru（アル）」を立ち上げました。「売れなかった1年」の経験から、「自分が好きなだけではなく、『欲しいと思う人がいるもの』を届けたい。」そんな思いで市場を調べる中でたどり着いたのが、フランスのアンティークプレートでした。商品は100年以上前にフランスでつくられたアンティークの器のみ。翻訳ソフトを使いながら現地のバイヤーとやりとりを重ね、商品の状態や刻印を確認し、納得したものだけを販売しています。このアンティークの器は既に窯元が無くなっているものばかりで、もう、その風合いは生み出されない唯一無二のものであることから、コレクターから根強い人気があるといえます。

「いつかは現地の蚤の市で、直接自分の目で選んで仕入れをしてみたい」

そんな夢も少しずつ膨らんでいます。商品の撮影、紹介



文の作成、発送、お客様への対応まで、すべて一人でしています。

「ずっと探していた器が見つかり嬉しいです！」とメッセージをいただくこともあり、お役に立てたと思えて嬉しいです。

Instagramで紹介した商品が、お店を開いてわずか5分で完売したこともありました。

さらに、発信を見ていた人から「Instagramのことを教えてほしい」と声がかかりました。

最初はネットの仲間向けに小さな勉強会を開く程度でしたが、やがてオンラインスクールの講師として活動するようになりました。そうして、一步步挑戦を続けてきた経験が、少しずつ自信へと変わっていきました。



「子育てと仕事の、バランスが大事」と、気づいた日

ネットショップが軌道に乗り、スクール講師としての活動も本格化すると、毎日は一気に忙しくなりました。

オンラインで受講生を募集し、めまぐるしく講座を進める日々。当時はコロナ禍でオンラインの需要が高まったこともあり、頑張れば頑張るほど結果が出る時期でした。

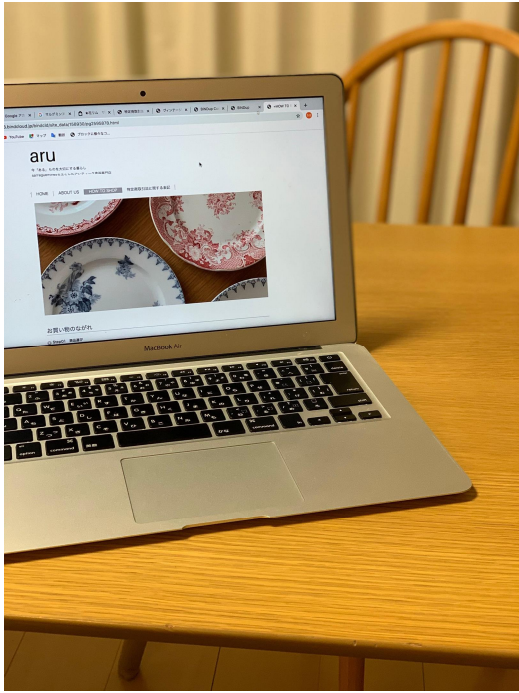
一方で、その頃は、自分でも気づかないうちに限界まで走り続けていたと振り返ります。

昼間は子育て、夜はパソコンに向かい、寝る時間を削って仕事をする毎日。ネットショップの運営、講師業、Instagramの発信…。やりたいことが増えるほど、自分の時間も、家族

との時間も少なくなっていました。

転機となったのは、長男が幼稚園の年中だった頃の出来事です。

ある夜、オンラインで仕事をしていると、突然、長男がこちらにやってきて腕にガブっと思いきり噛みついたのです。



痛みより、その行動に驚いていると、本人も驚いて泣き出しました。

「おかあさん、こっちを見て。」という気持ちの表れだったのかもしれませんが。

仕事は順調でしたが、家族との時間を犠牲にしてまで続ける働き方は、自分が望んでいた未来ではないと気づけました。

その出来事をきっかけに、スクール講師の仕事を手放して、働き方を見直しました。

「頑張りすぎることをやめ、「自分らしく続けられる働き方」を選び直したのです。

その後は改めてコーチングを学び、「成果を急がせる講座」ではなく、「一人ひとりの気持ちに寄り添う講座」へと内容も

変えていきました。

「帰ってきてよかった」――

箕輪町で見つけた、自分らしい暮らし

2021 年春、夫の転勤を機に、箕輪町へ戻ってきました。

「住むなら、やっぱり箕輪町がいい。」

そう思えたのは、生まれ育った町だからこそその安心感があったからです。

半年前に建てて引っ越した家の近所には同級生が住んでいて、子どもたちも同年代。自然の中でのびのび遊べる、この環境にも安心感を感じています。

アンティークプレートが並ぶ棚、自然光が差し込む窓辺、その部屋から多くのアイデアが生まれています。好きなものに囲まれていると、心が落ち着きます。以前は「もったいないから」とモノを手放せない性分でした。しかし今は、「本当に好きなもの」「今の自分に必要なもの」を大切にする暮らしへと変わりました。



片づけも完璧を目指すのではなく、明日の自分が楽になるように、「今日ひとつでも捨てたらOK!」と思うようにしています。小さな積み重ねを大切にし、Instagramでも、そんな日々の暮らしや気づきを発信しています。

誰かに憧れてもらうというより、『こんな暮らしもいいな』と思ってもらえたらうれしい』とはにかみます。

現在の仕事は、アンティークプレート専門店の運営、女性向けオンライン講座、ライターの三本柱です。

地域のフリーペーパーや『ESSE online』で執筆をするなど、文章を書く仕事も少しずつ広がっています。



好きなことを仕事にしたいと思って、好きなことを続けていたら、気づいたらそれが仕事になっていたのです。

交通事故を経験し、「いつ人生が終わるかわからない。だから好きなことをして生きよう」と決めたこと。

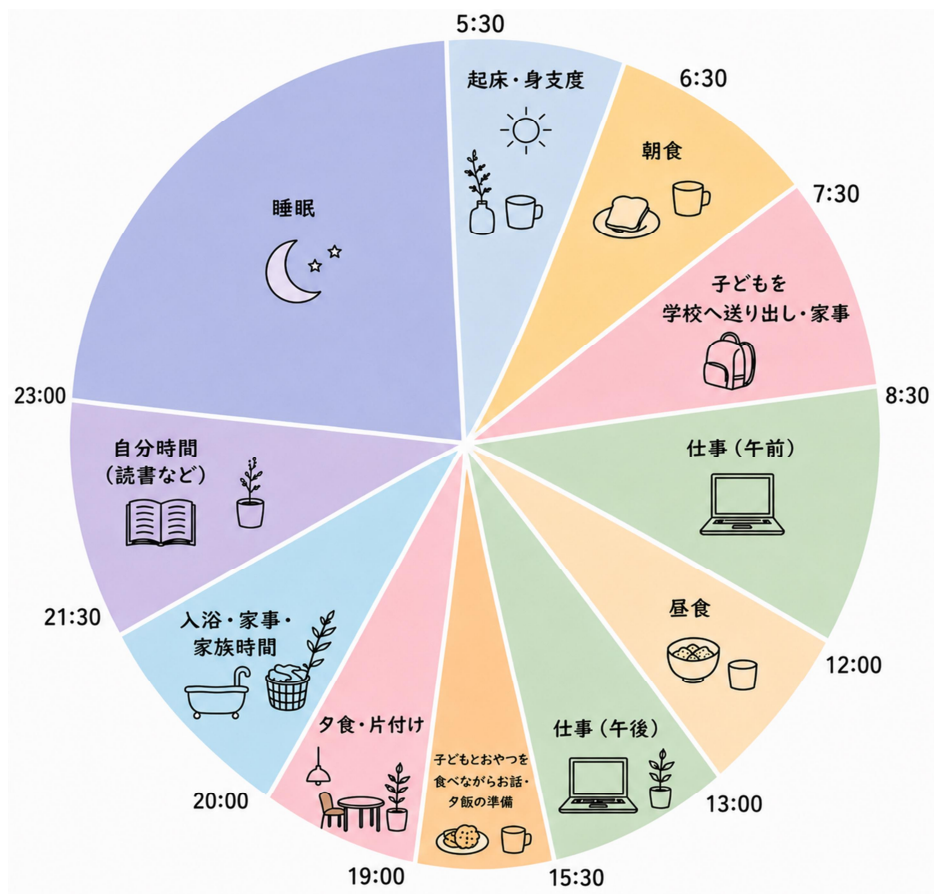
引越し先での孤独が、人とのつながりの大切さを教えてくれたこと。

仕事と家族の時間を見直すために立ち止まったこと。その一つひとつの出来事が、今の香苗さんをつくっています。



自分らしく働くことは、自分らしく生きること。日々の暮らしを大切にしながら、自分にとっての幸せを選び続けています。

香苗さんの暮らしが紹介された雑誌



香苗さんの、主な一日のスケジュール(R8.7)

まとめ

結婚式を目前にした交通事故で、「いつ人生が終わるかわからない。だから好きなことをして生きていこう」と決意したこと。引越し先での孤独な子育ての中で、「誰かと繋がりたい」という思いから始めた Instagram。そして、仕事が軌道に乗る一方で、子どもからの心の SOS サインから、働き方を見直したこと。

どの出来事も、その時は決して望んだものではありませんでした。しかし、そのひとつひとつが、香苗さんを今の場所へと導いていきました。

取材を通して感じたのは、香苗さんは「成功」を追い求めてきた人なのではなく、その時々自分や家族と向き合いながら、「自分にとっての幸せ」を選び続けてきた人だということです。

だからこそ、故郷へ戻り「帰ってきてよかった」と笑顔で話す姿には、大きな説得力がありました。

好きなものに囲まれた仕事部屋。自然の中で遊ぶ息子さん。文章を書く時間。アンティークプレートを手取るひととき。そのどれもが、香苗さんの「心がととのう 心地よい暮らし」なのだと思います。



取材を終えて家を後にするとき、窓から差し込む柔らかな光と、穏やかに微笑む香苗さんの姿が重なりました。その微笑みは「好きなものに囲まれて暮らす」ということは、モノに囲まれることなく、自分らしい人生を選び続けることなのだと、そっと語りかけているようでした。

取材：平賀裕子・千田るみ子
構成・執筆：千田るみ子
ご協力：関 香苗さん